ダルクローズのリズム教育(2)

― Rhythmic Movementを中心に ―

香山　知子

Ⅰ　はじめに

幼児期の音楽リズム活動は，音楽と身体の動きを分化させることなく，総合的なものとしてとらえていくことが重要であり，そこでは，音楽と身体の動きの関連が課題となる。

本研究は，ダルクローズの身体の動きを通したリズム教育について，その特質を明らかにするために，ダルクローズ・メソッドにおける身体的な動きの側面から考察を試みる。

リズム運動，即ちRhythmic Movementは，ダルクローズ・メソッドの一部門を構成するだけではなく，動的造型，即ちMoving Plasticとして，芸術化していく礎となるとされている。従って，ダルクローズ・メソッドにおけるRhythmic Movementと，Moving Plasticの両分野の身体的な動きの特質を検討することで，Rhythmic Movementの究極としてのMoving Plasticの位置付けと，その特質を，ダルクローズ・ユーリズミックス論とあわせて考察する。

Ⅱ　研究方法

ダルクローズの論文集，並びに指導書による文献研究。年代については，ユーリズミックスの発端となったジュネーヴ音楽学校在職時から，ダルクローズ・メソッドが確立され，同時に舞踊家との接触等により，総合芸術としてユーリズミックスが発展していく1900年～1930年頃の30年間に焦点をあてる。

対象文献（学会配布資料表1参照）

(A)　E. Jaques-Dalcroze: Rhythm, Music and Education (New York, London: G. P. Putnanis Sons 1921年)(板野　平訳)「リズムと音楽と教育」(全音楽譜出版社 1975年)

（尚，この和訳は，1967年，ダルクローズ生誕百年記念出版改訂版に依る）

(B)　E. Jaques-Dalcroze: The Jaques-Dalcroze Method of Eurhythmics: Rhythmic Movement (London: Novello and Company 1920年)（板野　平訳）「リズム運動」(全音楽譜出版社　1970年)

(C)　E. Jaques-Dalcroze: Eurhythmics, Art and Education (New York: Arno Press 1930年)，1980年(Reprint Edition)

対象文献(A)～(C)の論文にみられるRhythmic Movement及びMoving Plasticの練習内容について，1914年，1920年，1922～30年の3つの内容について，その特質を考察した。

Ⅲ　結果及び考察

(1) 1914年の論文にみられるRhythmic Movementの特質（学会配布資料表2参照）

練習項目は，21項目中20項目について，拍節，リズム，テンポ，フレージング等，音楽的要素を柱に練習内容が設定され，それぞれの練習内容は，「四肢の筋肉活動」「筋肉の緊張，弛緩」「呼吸」といった身体機能に関するものと，「拍節の記憶」「自発的な意志力」「集中力」「リズムの心拍聴取力」といった，主に精神機能に関するものが基礎となっている。また，それらに基づいた具体的練習内容としての例示はみられるが，Rhythmic Movementのメソッドとしての系列性は認められない。

(2) 1920年の指導書にみられるRhythmic Movementの特質（学会配布資料表3参照）

この指導書は，2～9拍子毎に，練習内容が示されており，その項目は，拍子，フレージング，音符の長さの分析……等といった，音楽的要素から成り，それに対応した身体の動きが示されている。身体の動きをさらに詳細に検討すると，手・腕に関する動き，足・脚に関する動きが全項目にわたってみられ，手・腕に関する動きでは，「腕で拍子をとる」「腕を上げる」「手拍子」の順に多くみられ，また，「足・脚に関する動き」では，「ステップ」「脚の交差」「膝を曲げる」「歩く」「走る」がみられ，「胴・全身に関する動き」として，「スプリング」「胴体を曲げる」「呼吸」といった内容が主にみられる。また，軀幹を動かすものとしては，スプリング，スキップ，胴体を曲げる等がみられるが，その数は少ない。さらに，動きの組み合せについてみると，「腕で拍子をとりながら歩く」など，同時に組み合せる，あるいは，単一の動きが中心である。

(3) 1922，1930年の論文にみられるMoving Plasticの特質（学会配布資料表4参照）

Rhythmic MovementとMoving Plasticに共通な練習項目として，「呼吸」「歩行」「ステップ」「時価の実現」「動きの中断」「体重移動」「手足の動きとエネルギー」の全17項目中6項目にみられる。各内容についてMoving Plasticの独自性からみると，「呼吸」では，音声と手足の拡張収縮の関連をダイナミックスと空間の両面か

ら練習するなど，時空間の拡がりがみられる。
また，「歩行動作」の項目は，両分野に共通であっても，Moving Plastic では，拍子，音符の時価から離れて，ステップの長さとダイナミックス，間(隔)との関連が内容となっており，音楽的要素とのつながりが少なくなっている。さらに，Moving Plasticだけにみられる練習項目は，「直立に向かって起き上る」「身体部位の節肉抵抗」「舞台の物質に対する身体的姿勢」「身振りと声の歩行」「パートナーの関連」(個と個)，「個人とグループの関連」(個と群)の6項目についてみられる。各項目の内容は，「直立に向かって起き上る」では膝をついた状態から直立姿勢まで急激に起き上る，即ち一息の一連の動きとして動きの流れとしてのリズムが感じられる動きや，「身体部位の筋肉的抵抗」の内容の，動きの連続性と軀幹の動きなど，「動きの連続」がみとめられる。また，舞台上演における練習内容や，「パートナーの関連」や「個と群」といった，身体の動きによる自己と他者との関連，即ち個人の動きの体験から群による動きへの拡がりがみられる。

以上，ダルクローズ・メソッドにおけるRhythmic MovementとMoving Plasticの特質をまとめると，

1. Moving Plasticの練習内容は，時空間への拡がり，動きの拡大，動きの連続性と軀幹の動き，舞台上演法，並びに個人の動きの体験から群への動きに，その独自性がみられるように，Rhythmic Movementの動きに加えて，新しい練習内容がみられる。これは，ダルクローズの「新しいテクニックは次第に古いものに付け加えられる」(対象文献(C)－P.67)の記述にも合致する。

2. 動きの連続性についてみると，それはMoving Plasticの練習内容の特質であり，軀幹の動き，即ち胴体の動き(Movements of Trunk)によることが明らかとなった。これは，Rhythmic Movementの手，足の動きにくらべて，Plastic Movementの独自性を明確にする点であるが，さらに，ダルクローズの述べている「Moving Plasticは姿勢でなくて動きに基づいている」((A)－P.167)及び「動きはすべての芸術の基礎である。」((A)－P.156)と考え併せると，Moving Plasticの芸術性が身体の動きの練習内容からも裏付けられるといえよう。

3. 音楽的要素と身体の動きの関連についてみると，Rhythmic Movementに比してMoving Plasticは，音楽的要素に対応した形では，身体の動きが内容としてみられない。これは，ダルクローズの記述の「Moving Plastic」が音楽化されたとき，はじめて音にたよらずに装飾的であり，表現的でもある動きの型をつくり出すことが，動き自体の音楽という唯一の助けによって探究される。」((A)－P.156)と併せて考察すると，音楽を基に始まったRhythmic Movementの継承発展したMoving Plasticは，表面的には，その練習内容から音楽的要素が減少する。が，それは同時に身体的動きの追求，即ちRhythmic Movement，を究め，Moving Plasticへと接近していくことが，身体を通した音楽的感情の追求へとつながり，その結果Moving Plasticはより音楽化されていくと考えられる。また，これは，感情，感覚を併せもち，ひとつの芸術分野を確立するものとして，Moving Plasticが位置づけられることになろうと推測される。

以上のように，ダルクローズ・ユーリズミックスにおける身体の動きは，Rhythmic MovementとMoving Plasticの両分野にみられ，それらの練習内容の差異から以下のことが明らかにされた。即ち，Moving PlasticがRhythmic Movementの究極として，より音楽化，芸術化され，そして音楽に類似した芸術分野を確立しているということである。これらの練習内容の差異からMoving Plasticの特質を探ることで，ダルクローズのリズム教育が単なる教育方法としてだけではなく，深遠なユーリズミックス論に基づいたものであることが理解されよう。これら，ユーリズミックス論との関連についての詳細な検討は，今後の課題であると考える。